

幼児の人間関係とその構築に関する一考察

—自己主張・自己抑制の観点から—

西 敏 郎

A study of the human relations of the infant and its construction —From the viewpoint of a self-assertion and self-control—

Toshiro NISHI

Abstract

The standards of human behavior and judgment are highly influenced by society. Especially in early childhood. From the perspective of social relations = human relations, this study adds a consideration to the construction of human relations and their influence in the process of human growth.

Keywords : human relations, self-assertion, self-control

はじめに

人の行動や判断の基準は社会からの影響を多分に受けている。まして幼児期ならばなおさらである。そこで本研究は社会関係＝人間関係という視点から、人が成長する過程での人間関係の構築とその影響力について一考察を付け加える事を目的としている。

1. 近年における人間関係の変化 (昔の子ども達の人間関係)

近年における人間関係の変化、それは何よりも社会構造の変化が先にあり、そこからその社会に生活する人間の生活と変容がもたらしたものである。1950年頃を境にしてわが国は高度経済成長政策によって社会に大きな変化がもたらされた。都市部の急激な都市化・産業化とそれらから必然的に生み出されていく地方の過疎化と高齢化、そして核家族化は人々のそれまでの生活行動様式を否応なく変化させていった。自営業の多くが賃金労働への生活を余

儀なくされ、労働そのものは外からの規制によって支配される状況となった。そしてそれに伴って地域間での移動も激しくなり人口は都市やその近郊に集中してき、農村部からは人口が流出し、先述の様に過疎化・高齢化の問題を生み出した。それらは言い換えれば昔ながらの地域共同体や人間関係が崩壊していく過程とも言えよう。否応なく家族形態はそれに準じ、それは子どもをめぐる環境にも変化をもたらした。

現在、私たちの暮らしにはあまりにも経済的なものや商業主義の影響が強くなり、社会とそれを構成する人々の価値観はそれに牽引されている。それらは結果的に人と人との関係の希薄化につながるものとなり、「これまでの人間関係の再構築」という現象となって表れた。隣人や近隣社会への無関心は今や都市生活のひとつの特徴であり、他人は他人、自分は自分と言う考え方は現代の風潮を象徴していると言える。確かに私たちの生活は経済的・物質的には豊かになったが、それとは逆に人間関係に代表される人と人との交わりなどは疎遠となり、個人の狭いエゴに閉じこもりがちなることからくる心の貧しさは着実に進行している。すなわち豊かな生活の中でこうした心の貧しさが私たちの子どもへの見方・関わ

り方に大きく影響及ぼしていった事は明らかであろう。

近年、子ども達は遊ばなくなったと言われる。それは遊びの内容や方法が変化したと言う方が適切かもしれないが、いずれにしても子ども達が戸外で遊んでいる姿をあまり見かけなくなった。この事に関して、よく子どもが遊ぶためには空間・時間・仲間の3つの間が必要とされるが、現在の子ども達においてはそのいずれもが欠けている。

その中で仲間関係が子どもの人間形成に及ぼす影響は極めて大きいとされ、子ども達は仲間と遊ぶ中で自らの役割を自覚するとともに人間関係のあり方を学ぶ。例えば石田一彦（岸井勇雄 他『人間関係』1990. 20）は私たち人間にとって人間らしく生き育ち合うためには仲間が必要と主張し、その意味で仲間を求めるのは人間の基本的欲求の1つと定義している。そして仲間集団が子どもの成長発達に持つ意味として以下の4つを挙げている（1）。

- ① 子供の親からの自立、あるいは独立を促す。
- ② 社会的ルール、個人の果たすべき役割や責任を、体を通して、生活感覚として学びとらせる。
- ③ 家族や学校とはちがった人間関係、つまり対等な立場での付き合い方を教える。
- ④ 自発性や、自治・自律の能力を育成する。

以上のように彼は子どもにおける仲間集団の重要性について説いている。

2. 現代における仲間集団（現代の子ども達の人間関係）

先と関連したものとなるが子どもの仲間集団は、現在ではその規模が縮小すると同時に地域を中心とした異年齢の縦型集団（異年齢集団）から同年齢・同学年による横型集団（同質集団）へと変容した（2）。この変化は集団そのものの弱体化をもたらしたが、その他にもいくつかの問題点を残している。その第一は年長児から年少児へと伝承されてきた遊びの文化が衰退したことである（3）。遊びの世界は子どもたちにとっての最大の楽しみのものであると同時に、人との付き合い方の基本を学ぶ場でもあった。大人でも無断で入り込む事を許されなかった遊びの文化

の衰退は子ども達が自らの世界を喪失し、資本主義・商業主義も相まって大人たちに管理された人工的な世界に押し込められることにつながっていく。第二に、子ども達は身近な具体的目標を失うことになった（4）。昔はよく年少の子は兄や姉に連れられて遊びに参加させてもらった。遊びの上手な年長の子は彼らにとっての憧れの対象であり早くそれに追いつこうと努力すべき目標でもあった。子ども達は異年齢集団の中で年上の先輩たちがその目標を成し遂げていく様子を何年にもわたって繰り返し見てきており、先輩や兄や姉の苦闘や涙して、やっとそれを成し遂げたときの喜びの様子も見ていた。同時にそれは、次は自分の番であると言う緊張感も発生させ、友人に先起こされようものなら密かに練習して力をつけなくてはならない焦りも迫られた。社会の大人達は決してそれを助けてはくれないが、それを見守り必要に応じてフォローする体制ができていた。つまり子ども達には成長する時間と場所、そして途中で立ち止まれる余裕が与えられており、これらは積極的な学習や鍛錬の動機付けと言う点でもうまくいっていたのである。対して現代は子ども達の自発性の低さや発信力の低さが度々問題となっているが、そういったところに原因があると言える。

かつては親族等は近くに住んでいて、一度ことがあれば親戚はすぐに集まれたが、現代は都市化が進み家族形態は変化し、新しい家族は都会に作られ遠くなった親戚はやたらと集まることができなくなった。これはそれまでの人間関係の喪失を意味する。近年までは、子どもの周りにいろいろな人間関係があり、それも親身になって関わってくるので一族の手前なかなか不良行為は出来なかった。たとえ道を踏み外そうとしてもそれを止めようとする圧力が次から次へと掛かる仕組みになっていた。これは悪く言えば親戚一同が世間体を気にして保身を図ったと捉えられるかも知れないし、良く言えば多くの人々の濃密な人間関係の中で子育てが進行していたと捉えられる。近年のわが国の社会状況の変化は、結果的に子育ては広い人間関係から狭い家族の中へと閉じ込められてしまったと言える。

3. 幼児と道徳性

これらを踏まえ子ども達は仲間集団・人間観関係の中から様々なモノを学び、その影響を大きく受け

ることが良く理解できる。今回はその過程から道徳という要素に注目していきたいと思う。なぜなら人間関係の前提として「自己の確立」や「他者との関係」というものが存在するからである。そしてその基準となるのが「道徳」だからである。それは「自己の確立」や「他者との人間関係」の構築を促し、その後そこからルールを守ることや、ルールにない問題に直面した時、それを解決していく力を発揮させるその土台となっていく。

したがって本項では幼児の道徳の構築について考察する。社会における人間関係を研究している社会学において「道徳は特定諸規則の総体であり、そしてそれはわれわれの行為が流し込まれる鑄型のようなものである」と説明している(5)。ここから道徳の一要素として規則性が導きだされる。しかし規則は単なる行動の習慣ではなく行動の規範である。つまり規則の概念のなかには、規則性の他に権威の概念も含まれているのである。すなわち道徳は単なる「習慣の体系」ではなく「命令の体系」でもある。ここから道徳には「規則性の感覚」と「道徳的権威の感覚」を統一する「規律の概念」が確認できる。したがって道徳の第一要素として「規律の精神」が挙げられる。第一要素の「規律の精神」というのは、規則を形式の側面から見ることによって取り出されたものである。なぜなら道徳的行為と呼ばれているものは、全てそれがあらかじめ設定された規則に合致しているという共通の性質を有しているからである。というものであれば、一定の規準に従って行動することであって、この規準は人がある行為をなそうと決心するまでもなく、すでにそれ以前に特定の状況においてなすべき行為をあらかじめ決定しているからである。

すなわち道徳の領域とは義務の領域であり、義務とは命令された行為である。ここから道徳とは「人間の行為に規則性を与えることが、道徳の根本機能」と捉えられる。そして次に必要なのは、その規則を内面から捉えることである。先ほど説明したように規則は道徳的価値を有する内面をもっている。しかし観察にしたがえば純粋に個人的な目的の追求において規則は道徳的価値をもたない。であるならば道徳的行為の目的は非個人的な目的となるはずである。ただし非個人的ということが何を意味するかは注意が必要である。それは複数の個人を意味するのではなく、非個人的目的というのは社会に他ならない。当然、社会とは単なる諸個人の集合体ではな

い。つまりここから道徳の第二要素として「社会集団への愛着」が導き出される。

そして最後に、これら“道徳を理解する知性”と、“この行為の命令”を自由意志によって受け入れることから「意志の自律性」が導き出される。まとめれば“道徳”とは

1. 規律の精神
2. 社会集団への愛着
3. 意志の自律性

以上の3要素で構成されていると言えよう。

おわりに

人間はその思考と存在の大部分を社会に負っている。言語・文化・伝統などに代表されるように、人間の思考、判断、活動のベースとなるものは、すべて社会より承けたものであり、子どもならばなおさらである。そして社会的な影響を受けやすい幼児期はまさにこれらの基礎がつけられる時期である。したがって道徳等のキーワードも踏まえながら、幼児期の人間関係(社会関係)に注目してることがより重要であると言える。

引用文献

- (1) 岸井勇雄 小林龍雄 高城義太郎 朽尾 勲
『人間関係』株式会社チャイルド本社
pp20 1990
- (2) 福田誠治『子育ての比較文化』平文社
pp25-26 2000
- (3) 岸井勇雄 小林龍雄 高城義太郎 朽尾 勲
『人間関係』株式会社チャイルド本社
pp20 1990 および
福田誠治『子育ての比較文化』平文社
pp25-26 2000
- (4) 福田誠治『子育ての比較文化』平文社
pp53-55 2000
- (5) 中島道男『エミール・デュルケム —社会の道徳的再建と社会学—』東信堂 pp67 2001

参考文献

- (1) 片桐新自 他『基礎社会学』福村出版株式会社
2004
- (2) 友松諦道 他『保育内容★人間関係』建帛社
1991
- (3) 畠中徳子 他『人間関係ーかかわりあい・育ち
あいー』不昧堂出版 1996
- (4) 保育者と研究者の連携を考える会『保育におけ
る人間関係』ナカニシヤ出版 2009